

新約聖書で真っ先に出て来る婦人は祭司ザカリヤの妻エリサベツです。
エリサベツ、ヘブル語の意味は「神様は私の誓い」または「神様を礼拝する者」です。

----- エリサベツの人格 -----

さて祭司である、夫ザカリヤ同様、彼女も祭司の家に生まれ共に名門の出でありました。とは言え、そんな事を鼻にかける様な女性ではありません。いつも明るく、しとやかに夫に仕えて、ずと今まで何十年もの間、夫と共にイスラエルの神に仕えておりました。しかし、いよいよ彼女の人生も残り少なくなって来ました。人生のたそがれ？ 今そんな所に立たされているエリサベツでした。

それにしても、この二人は今までずと、律法を守って、規則正しく、聖い生活を共に貫いて生きて来たのですが、ただ一つだけ残念な事がありました。それはこの二人は、この年になっても子供に恵まれませんでした。それだけが残念と言えば残念なことでした。

----- 主にゆだねた生活 -----

さてこの当時、子供は神の祝福のしるしと考えられていました。そんな時代でした。そんな中でエリサベツさん、「神様どうしてですか？なぜ与えて下さらないのですか？」と悩んでいた時も過去に確かにありました。でも今では、現実を静かに受け入れておりました。「これでいいんだ、神様は悪いことや間違った事をなさるはずがない、神様を信頼して、これからもこのお方に従って行けば必ず良い結果を与えてくださるはずだ。」という信仰に固く立っておりました。

ところで、二人の住まいは、エルサレムの南、ユダの山地にある小さな町（エンカレム）です。そんな静かな小さな町で、二人は年を重ねながら神のみ前で心静かに毎日を過ごしていました。もう今は、子供の事は主に明け渡して、主にすっかりゆだねてきていたそんな二人だったのです。

----- ある日、突然・・・ -----

ところがある日、静かな生活を送っていた二人の上にとんでもない事が起こりました。夫は幸運にもくじに当たったのです。そして名誉ある神殿での大切な働き、香を焚く最高の奉仕をいただきました。そしてその奉仕のためザカリヤは神殿に入りました。ところがやがて、夫が神殿のお勤めを終えて神殿から出て来たのですが、なんと口が全くきけなくなっていたのです。驚いたみんなが、「どうしたのですか？ 何があったんですか？ 何かひとことでも言ってくださいよ。」と尋ねても、彼は辛そうに首をふるばかりです。そんな彼を迎えた時の妻エリサベツは、どんなにか、驚き、悲しんだことでしょう。

「神様どうして？」という心が、今エリサベツの心の中に起きあがって来そうでした。しかし、彼女は「神様は真実で、正しい良いお方です。」と言う信仰に立ちました。

----- ザカリヤの伝えたこと -----

仲間の祭司に聞きました。彼らの話しによると、神殿の中で何か幻を見たらしいと言うのです。（それにしても、彼らだって神殿の中にいたわけではないので、本当のことはわかりません。）

やがて落ち着きを取戻してからも、依然としてしゃべる事が出来ないザカリヤでしたが筆談で、次の事をエリサベツに語り始めました。

- 1、神殿の中でみ使いガブリエルが現れたこと。
- 2、そのみ使いから私たち夫婦の間に、なんと男の子が与えられると言われたこと。
- 3、その男の子の名前はヨハネとする事。
- 4、その子は大人になると、人々の心を神に帰らせる大きな働きをする者となること。
- 5、そしてもう一つ、私はこれらの事を信じなかったのが今、罰を受けて話せなくなっている。・・・事などを伝えました。

----- エリサベツの反応 -----

その時エリサベツはどんな反応を示したでしょう。「まあばかばかしい、なんてくだらない作り話しをしているのですか。自分がしたことの失敗を隠して、み使いのせいにするなんて卑怯よ。」などと言ったのでしょうか？ いいえ、そんなことを言う様な女ではありません。むしろ、夫の話しを、素直に聞いて受け入れました。そして、これからの時代の大事な神様のご用に、自分たちのような者を選んで下さった神様に心から感謝するのです。更に、このイスラエルの民を顧みてくださる、そんな素晴らしい神様のみ業が、やがて私たち夫婦から生まれてくる子供（ヨハネ）を通して、いよいよ始まろうとしていることを知って、夫ザカリヤと共に神様をあがめるのです。

----- 感謝の日々 -----

24節「しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。」

やがて、御使いを通して与えられた、主のお約束どおりエリサベツは身ごもりました。

私は想像するのですが、今ザカリヤもエリサベツもみ使いと出会ってみ言葉を聞いてから、あつと言う間に、二人とも若返ったのではないかと思います。神様がこの年になってから二人に、子供を宿す力を与えられたのです。胎児の性別はもう分かっています。男の子です。そして、名前はヨハネです。そして、やがて大きくなったお腹をかかえる様になったエリサベツは、神様の恵み深いことを人々にあかししました。夫ザカリヤも十月十日、今は口が聞けない身ではありますが、このことがすべて、み使いに告げられた通りである事を受け止めて、心から神に感謝し、喜んでいるのです。

----- マリアの訪問 -----

さて、妊娠6ヶ月になった頃、エリサベツは思いがけない客の訪問を受けました。なんと、親戚のマリアさんが、はるかガリラヤのナザレ地方から、このユダの山地の町にまではるばると尋ねて来たのです。

クリスマスの時は、夫ヨセフとの二人旅でしたが今回は女、一人旅です。（ナザレからエンカレムまでは約120km、浜松から名古屋辺りまでの距離）これも奇跡の中の奇跡ですね。

ここで少しマリアの事を学びましょう。

実はマリアにとってエリサベツの存在が、とても大きな勇気を与えていたのです。当時のユダヤ社会では、結婚前に妊娠したことが分かると女性は死刑でした。ですからマリアの心にはさまざまな不安な思いが繰り返し、繰り返し横切ってきた事でしょう。

38節「・・・どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」と、み使いに

答えたとしてもやはり不安であったと思います。怖さを感じていたと思います。ナザレの町の人々の、マリアを見る目が変わって来ました。

そんなある日、マリアは親戚のエリザベツおばさんのもとを思い切って尋ねます。そしてエリザベツおばさんと出会います。彼女との交わりの中でマリアは癒されました。平安、確信、喜びが与えられました。交わりは大切ですね。祈りの細胞の大切さを教えられます。

その箇所を読んでみましょう。

39～41節「・・マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。エリサベツがマリアのあいさつを聞いた時、子が胎内で踊り、エリサベツは聖霊に満たされた。」

そのマリアのあいさつの声を聞いた時、エリサベツは自分のお腹に宿っている子が躍るのを感じました。聖霊に教えられて、すべてがわかりました。わかったのです。実は、少し前の時までは「自分の胎に宿るこの子は、預言者の言っていたメシヤになる子かも知れない。この私がもしかしたらメシヤの母になるのかも知れない。」と考えた時もありました。実はイスラエルの多くの母たちは誰もがそのことを願い、可能性を考えていたのかもしれませんが。でも目の前の本物の光を見れば、このマリアさんが救い主の母親だとわかります。

そうですね。このマリアさんこそ救い主を、この世に生み出すために、主に選ばれた、世界中でたった一人の女性なのでした。そのことが本当にはっきりと今わかったのです。そして、エリサベツは素直に「主のしもべ」になることが出来ました。聖霊によって謙遜をいただいたのでした。

----- 聖霊に満たされたエリサベツ、そして讃歌 -----

二人が出会った時、エリサベツは聖霊に満たされました（41節）。（35節、聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。）聖霊に満たされたマリアと出会ったその時、そのマリアに注がれたのと同じ霊が今エリサベツにも注がれたのです。

そして、ここから**エリサベツの讃歌**が始まります。

42～45節「そして大声で叫んだ。『あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私の所に来られるとは、どうしたことでしょう。あなたのあいさつの声が私の耳に入った、ちょうどその時、私の胎内で子供が喜んで躍りました。主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。』」

さて、繰り返しになりますが、この時点でマリアは、正式な結婚の前に妊娠したのですから世間の人々の誤解の目を避けてエリサベツのもとに、のがれて来たのではないかと思われま。不安を抱えているまだ若いマリアでしたから、そんなマリアにとってエリサベツからの先程の、42～45節の祝福の言葉はどんなに、大きな慰めになったことでしょう。

----- 3ヶ月間の交わり -----

56節、さてそれから3ヶ月間、マリアがエリサベツのもとに滞在していた間、二人は素晴らしい交わりを体験しました。二人は室内で交わり、屋外で交わり、木の下で交わり、そして語り合いました。互いの信仰はいよいよ、より確かなものになって行きました。

それにしても祝福されている者同士が会い交わる時、それは更にすごい祝福（聖霊の満たしの体験）となります。マリアにとっても、エリサベツにとっても、この出会いはこれ以上もない恵みとなりました。

実は、夫のザカリヤは神の幻を見て以来、物を言うことが出来なくなっています。その結果、2人は夫婦であるのに、子供が授けられることに感謝したり、夫婦2人で賛美したり、喜びを語り合うということが出来なかったのです。それは彼女にとってはとても寂しいこと、辛かったです。ですから今マリアの訪問を受けてエリサベツは非常に喜びました。神の祝福の素晴らしいみ業を彼女と共に**喜び合う**ことが出来たからです。

その様な中で、あの有名な**マリアの讃歌**も又、歌われるのでした。 「46～55節」

56節「マリアは、3ヶ月ほどエリサベツのもとにとどまって、家に帰った。」

やがて、3ヶ月の後、マリアは家路につきました。ここから新しいマリアの人生の歩みが始まります。もう迷いません。誰かから何を言われようと、非難されようと、たとえ石で打たれようと、もう何も怖くありません。今、彼女は聖霊に満ちあふれていました。

———— ザカリヤの口が開かれた ————

57～79節 その後、幾日もしないうちにエリサベツの出産の日となりました。やはり男の子です。1週間が過ぎて、子供の割礼と命名の日の時のことです。祝福をしようと集まって来た人々の前でエリサベツは慣例に逆らって、この子の名はヨハネと主張します。人々はみな驚いて夫ザカリヤにも手招きで尋ねます。もちろんザカリヤも筆談で迷うことなく「その子の名はヨハネ」（63節）と告げるのでした。その時です。ただちにザカリヤの口が開かれました。そして次の様に預言しました。

ザカリヤの讃歌です。 「67～79節」 （76節）「・・幼子よ、あなたこそいと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え・・・」

おそらくヨハネが、その使命を果たす日が来る前に、母エリサベツは地上の歩みを終えたことでしょう。しかし彼女の心は、他の誰よりも早く、救い主の到来を知らされた喜びに満たされていました。

今年も私たち、この救い主がこの世に来られるクリスマスに、他の誰よりも期待を持って待ち望みたいと思います。

64節、「すると、ただちにザカリヤの口が開かれ、舌が解かれ、ものが言えるようになって神をほめたたえた。」

今の時代、コロナの影響で、賛美するのが難しい時でもあります。でも今年もまた、賛美満ち溢れるクリスマスにしたいですね。